パラリンピックこそ、チャンス！「住まいと心のバリアフリー」を。

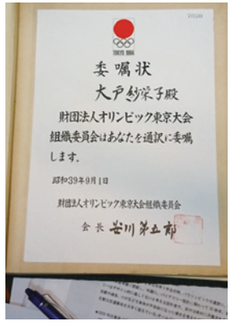
だからこそ、東京でのオリ・パラ開催が決まったときに第1回のパラリンピックで自らが体験をして得た「心のバリアフリー」を後世に伝えられるチャンス！と、語学奉仕団のOB、OGを結集して「お茶会」の提案をしたのです。

若いときに障がいのある人に接することが偏見のない心を育てる、と活動への参加を若人にも呼びかけています。

「パラリンピックには社会を変えていく力があると思います。これをチャンスに気運をもりあげて欲しい。」とも。

取材を受ける吉田さんの手元にあるのは、黒い布で装丁を施した55年前の卒業論文。後方の和室には収納も兼ねた「畳」の寛ぎスペースを設け、客人の寝室にも活用。

（右）パラリンピック選手村の「通門証」。（下）イタリア選手団と記念撮影する吉田さん。



（左）1964年のオリンピック東京大会組織委員会よりの通訳の「委嘱状」。（右）新聞記事「第1回　聖火のかげで／よろず相談も覚悟して」より（昭和39年9月4日）。

21歳でバリアフリーに出会った吉田さんは25歳のときに結婚。夫の転勤に伴いドイツへ。31歳で出産し生後8か月の娘を連れて帰国。3歳までは自分で育てると決めていたので、仕事復帰は30半ばを過ぎてからになりました。

建築家として油の乗ってきた40歳を迎えたころ、吉田さんは突然〈変形性股関節症〉で歩行困難に陥ります。

「手術を勧められたのですが拒否しました。私の周囲には障がい者が大勢います。杖で歩く位どうってことない！」と。今もトレーニングに通っています。

ドイツで産み、東京で育てた一人娘の愛梨（えり）さんは大学卒業後、結婚してミュンヘンの大学院に夫婦で4年間留学。帰国後は熊本の南阿蘇村にある夫の実家に「農家の嫁」として移住しました。

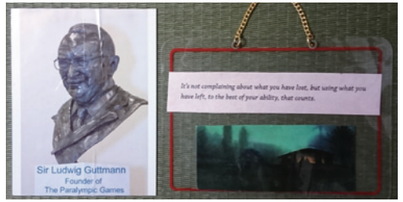
「娘が男の子の双子を筆頭に、4人も孫を生んでくれて（笑）。」女性農家のNPO理事長として活躍し、超多忙の愛梨さんに「将来、介護されたかったらこっちに来て。」と誘われ、吉田さん夫妻は一昨年、娘さんの家から1キロ離れた所に民家を購入しました。

「夫は大自然が気に入って一足先に移住。私は娘が一瞬でも自分の時間を取り戻してくれたら…と、仕事を調整しながら、月のうち1週間は阿蘇に。」

〈高齢も障がいもひとつの個性〉と唱えるバリアフリーの先駆者・吉田さんの個性が阿蘇の住まいにも息づきます。

娘の愛梨さんと孫娘の里咲（りさ）ちゃんが訪れ、笑い声の絶えない至福のひととき。「スープの冷めない距離」に見つけた築45年の民家は居心地満点の終の棲家に。

「農業・農村の魅力や可能性を広げる」ための活動をしている女性農家の方々のエッセイ集『耕す女』。電子書籍版もあり、ネットで好評発売中。



パラリンピックの父・英国ストーク・マンデビル病院・脊椎損傷センター所長のルートブィヒ・グッドマンの言葉「失ったものを数えるな、残されたものを最大限生かせ」を吉田さんは〈座右の銘〉として大切にしている。

阿蘇の家のベランダからの眺め。目前に広がる大自然をご夫妻で楽しむ。

NPO法人田舎のヒロインズ
http://inakano-heroine.jp/sunmoon/